■海外研究事情

世界の労働関係研究所・資料館・図書館（6）

——マサチューセッツ大学アマースト校図書館とスミス・カレッジの資料館

五十嵐　仁

はじめに

2002年６月25日，私はマサチューセッツ州の西にあるアマーストというところを訪問した。ヤングスタウン州立大学での労働者階級研究大会で知り合ったアンバーさんとの約束を果たすためである。

アマーストは，マサチューセッツ州西部のパイオニア・バレーに位置しており，ボストンからバスで３時間かかる。ここには，マサチューセッツ大学アマースト校U-Mass Amherst(1)と，アマースト，ハンプシャー，マウント・ホリヨーク，スミスの４つのカレッジがある。この５つの高等教育機関は隣接しているためFive Collegeと呼ばれ，共同の無料巡回バスを走らせたり，授業の履修や図書館の利用を共通にするなど，密接な協力関係を持っている。

日本との深い縁

このFive　Collegeのうち，私はマサチューセッツ大学の図書館とスミス・カレッジの図書館を訪問するため，ここにやってきた。しかし，実は，この地は色々な意味で日本に縁のある場所なのである。

まず何と言っても，あの「少年よ，大志を抱け！」という言葉で有名な札幌農学校のクラーク博士との縁をあげなければならない。博士は，ここのアマースト・カレッジを出ただけでなく，そこで教鞭も執っている。

また，博士はマサチューセッツ大学アマースト校の前身であるマサチューセッツ農科大学の第３代学長でもあった。その縁で，キャンパス東側の一角にはクラーク博士記念庭園がある。

博士が札幌から持ち帰った苗が大きくなったというニレの木や夫妻の墓もアマーストにあるそうだ。マサチューセッツ州と北海道は姉妹関係を結んでいるが，それはこれらの縁によるものである。

もう一つの縁は，同志社大学の創設者である新島襄に関するものである。新島は日本から密航してアメリカに渡り，クラーク博士と同じアマースト・カレッジで学んでいる。

当時の船旅は今では考えられないほど過酷なもので，しかも密航だから上陸してからも国家の保護を受けられない。こちらでの生活の苦労は私などの比ではなかっただろうし，英語の勉強も大変だっただろう。

まさに，命がけで勉強に来たわけである。その志の大きさ，向学心の強さ，行動のエネルギーに感嘆させられる。新島はアマースト・カレ

(1)　マサチューセッツ大学アマースト校について，詳しくはhttp://www.umass.edu/を参照。

ッジで学んだだけでなく，そこで化学を教えていたクラーク博士の教えも受けており，博士は日本に行ったとき新島を訪ねている。

その後，新島はイエール大学に進み，日本に帰国して同志社大学の前身である同士社英学校を設立することになる。この新島の薦めで，内村鑑三もアマースト・カレッジで学んでいるから，アマースト・カレッジと日本との縁はなかなか濃いものがあると言えよう。

この他にはもう一つ，日本との縁がある。そしてこれについて，恥ずかしながら，私は今回のアマースト訪問を計画するまで全く知らなかった。

それは，ベンジャミン・スミス・ライマン(2)という「お雇い外国人」についてのものである。彼はマサチューセッツ州ノースハンプトンというところで生まれ，ハーバード大学を卒業した後，アメリカ各地の地質調査などを行なっていた。日本へは1873年に北海道開拓使に招かれて鉱山技師として行くことになる。

このライマンが日本から持ち帰った江戸時代後期から明治時代にかけての文書・資料類がライマン・コレクションで，現在はマサチューセッツ大学アマースト校の図書館の一角に収蔵されている。今回のアマースト行きでは，このライマン・コレクションを訪れるのも目的の一つだった。

アマースト校図書館

アマースト行きのバスは，グレイハウンドではなくピーターパンだった。前者は，アメリカ全土に展開している長距離バスだが，後者は，主としてこの地方で運行されている中・長距離バスである。

チケットや営業所などは共通だから，提携関係にあるのだろう。バスの仕様や運行の仕方なども，ほとんど同じである。

今回もコーネル大学訪問時のイサカ行きと同様にバス旅行日和で，青空の下，快適なバスの旅だった。しかも，帰りのバスでは，テレビで映画を放映するサービスまであった。

バスは，時間通りにマサチューセッツ大学アマースト校に到着した。停留所はキャンパスの中のFine Arts Centerの前である。

バスを降りて見上げると，目的の図書館が空の上にそびえている。28階建ての高層ビルで，回りには高い建物がないからすぐに分かった。

この建物を目指して歩いて行ったら，向こうから来た女性に声をかけられた。この図書館の東アジア部門(3)で索引作りを担当しているシャロン・ドマイヤーSharon Domierさんである。わざわざ私を途中まで，迎えに来てくれた

アマースト校の高層図書館

(2) ライマンは1873～75年にかけて，茅沼炭鉱の地質調査のため北海道の泊村を訪れた。このとき食用の肉を蓄えておくために掘らせた岩穴が残っており，「ライマンの肉貯蔵庫」というユニークな史跡になっているという。http://www.tokeidai.co.jp/tomari/villa/m6.html参照。

(3) マサチューセッツ大学アマースト校大学図書館東アジア部門について，詳しくは，http://www.library.umass.edu/subject/easian/を参照。なお，シャロンさんが作成した日本研究についてのサイトhttp://www.library.umass.edu/subject/easian/eajpn.htmlもある。

というわけだ。

この方は日本の図書館情報大学を卒業され，宮崎にある大学で働いた経験もあり，日本語がペラペラだ。これには助かった。しかも，ずっと私に付き添って案内してもらっただけでなく，お昼までご馳走してもらった。

この高層図書館の左側にある建物は，元々は教会で，最初の図書館として使われていたものだという。この高層ビルの地下に，図書の受け入れや整理などを行う職員の事務室や閲覧室がある。シャロンさんは，採光が悪く空気も淀んでいるため，病人が出るほどだとぼやいていた。その上，この高層ビルは元々は図書館を予定していなかったため強度に問題があり，書庫は一階おきに設置されているという。

さらに，当初コンクリートの打ちっ放しだったそうだが，その外観に苦情が出てビルの回りに煉瓦を張り付けたところ，最近になって剥落するようになったとかで，回りには柵が設置され，立入禁止になっている。

このように，この高層図書館は，外来者には分かりやすくて助かるが，色々と問題があるようだ。そもそも，パイオニア・バレーの一角で広いキャンパスがあり，十分なスペースがあるだろうに，何故，28階もの高層ビルを建てなければならないのか，その辺が私には理解できない。

それはともかく，このビルの25階に特別コレクションの閲覧室がある。私たちもまず，そこに向かった。エレベーターを出て，窓の外の景色のすばらしさに驚嘆した。遠くを低い山並みが囲み，緑を敷き詰めた中に，点々と建物が位置している。天気も良く，絶景というべき眺めだった。

ここの労働関係コレクションは，全国レベルのものではなくマサチューセッツ州やニューハンプシャー州など近隣地域に関わるものが中心である。特にマサチューセッツ州AFL・CIOの資料は1902年から1995年までのものが揃っている。

産業レベルでは，紙パルプ，金属食器，石工，繊維，鉄鋼，電気関係のものがある。これも，この地域に関連するものが多いそうだ。

整理された資料を見たとき，「整理の仕方はどこも同じですね」と言ったら，「それはそうですよ。教科書に書いてありますから」と言われた。アーキビストの教科書に資料整理の方法が書かれており，アメリカのアーキビストはこれに従って整理しているというわけだ。

日本ではどうだろうか。このような共通の資料整理の方法が確立されているのだろうか。それを記述した教科書のようなものはあるのだろうか。

資料は購入ではなく，全て寄贈によるものだという。やはり，ここでもスペースや資金，スタッフの不足という問題があるようだ。そのために資料は選択的に受け入れており，個人関係のものはできるだけ避け，組織の活動に関連したもの，歴史的な価値の高いものを選ぶようにしているという。

リンダさん（左）とシャロンさん（右）

この後，シャロンさんと一緒に食事に出たが，その時，見慣れない機械を目にした。「これは何ですか」と聞くと，「自動貸出機です」という答え。機械による自動貸し出しのための装置

だそうだ。

本を借りる人は，この機械の光が当たっているところで，自分のＩＤカードのバーコードを読みとってもらう。これで誰が借りようとしているかが記録される。その後，借り出す本に付いているバーコードをこの光に当てるだけで借り出しは終了である。何時，どのような本を借りたかが記録され，返却請求なども自動的になされるという。

私たちの前では，大学院生らしい学生が30冊ほどの本を抱えてきて次々に登録して借り出していた。法政大学の図書館にもこのような機械はあるが，自分で借り出すという形にはなっていない。このようなやり方はこちらでもそれほど多くないそうだが，ハーバード大学の図書館では見かけなかった。

食事の後，ライマン・コレクションの中から，鈴木牧之の『北越雪譜』を見せていただいた。ライマンが購入して持ち帰った江戸時代のものである。越後は私の生まれ故郷だが，「北越」ではない。しかし，雪についての記述には親しみがある。中には，雪の結晶を図示したものがズラリと並んでいた。

もう一冊，滝沢馬琴『南総里見八犬伝』の初版本も見せていただいた。昔，子供向けに書き直されたものを夢中になって読んだ覚えがある。８人の犬士が持っている玉に彫りこまれた８つの文字，仁，義，礼，智，忠，信，孝，悌は，自分の名前の文字が入っていることもあっていまだに覚えている。小さい頃に覚えたものは，いつまでも忘れないものだ。

本をパラパラとめくってみた。文章は良く分からないが，挿入されている挿絵はなかなかの迫力で，なじみ深い名前が次々と現れる。懐かしい思いがした。

ここで，「このようなものもありますよ」と言って見せてもらったのが，ライマンが持ち帰った名刺のコレクションである。名刺が，いつから，どこで始まったのか，それがどのように日本に伝わってきたのかは良く分からない。しかし，明治の初めの日本に，早くも名刺が普及していたことが分かった。

知っている名前では，北海道開拓次官だった「黒田清隆」のものがあったが，肩書きは書いてない。名前だけである。その他にも，調所広丈，盛隆，山崎守，小室誠一などの名前があったが，そのほとんどは名前だけで，どのような人物かは分からない[(4)]。

外国人の名前も多く，当時の人間関係や交流を知る貴重な資料である。ライマンが張り付けたのか，スクラップブックに綺麗に整理されてあった。

スミス・カレッジの資料館

この名刺コレクションを見ていたとき，スミス・カレッジSmith College[(5)]のアンバーさんが現れた。この方は私がアマーストに来るきっかけを作った人で，ここで待ち合わせていたのである。

これから，車でスミス・コレクションSophia Smith Collection[(6)]に案内してくれるというわけだ。車で20分ほど離れているというから，大

(4) このうち，調所広丈については，黒田清隆の部下で，1872年に黒田が東京芝増上寺に開設した「開拓使仮学校」の校長心得となり，その後，札幌農学校長となったことが分かった。この札幌農学校に招かれて赴任したのがクラーク博士だから，黒田，調所，クラークの３人は，因縁薄からぬ間柄だったことになる。

(5) スミス・カレッジについて，詳しくはhttp://www.smith.edu/を参照。

(6) スミス・コレクションについて，詳しくはhttp://www.smith.edu/libraries/libs/ssc/home.htmlを参照。

助かりだ。

スミス・カレッジはソフィア・スミスという人が創立した女子大学である。大変な資産家で，大学の創立資金を出したそうだ。コーネル大学におけるコーネルと同じ立場である。アメリカの大学では，資金を出してくれた人物の名前を大学や施設に付けて顕彰するという伝統があるようだ。

ここのFaive Collegeには，もう一つ，マウント・ホリヨーク・カレッジという女子大もある。こちらは1837年に創立されたアメリカ最古の女子大である。この二つの女子大を含めて，ニューイングランドには有名な女子大が７つある。これをSeven Sistersと呼んでいるという。

スミス・カレッジは，アマーストから少し離れたニューハンプトンというところにあった。回りには塀のようなものはなく，市街とキャンパスの境が分からない。住宅街の中に大学の施設が点在しているという感じである。

学生が住むという寮も普通の住宅を少し大きくしたようで，回りの住宅街にとけ込んでいる。ここのキャンパスも，広くはないが落ち着いた雰囲気で歴史を感じさせる。

スミス・コレクションのある図書館

スミス・コレクションは女性関係の資料を集めたアーカイブスである。女性労働運動関係の資料も沢山ある。

閲覧室のある建物の他にも書庫があり，全部で三つになるという。全て，図書などの印刷されたものではない，原資料類で埋まっている。

書庫の中に案内してもらったが，段ボールの箱がズラリと並んで，壮観な眺めである。それぞれの箱やファイルには番号が付されており，カタログでボックスの番号を調べなければ，必要な資料がどこに入っているかは分からない。

書庫は厳重に管理されていて一般の人は入室できない。でも，このようなシステムでは，中に入っても，何がどこにあるかは分からないだろう。これは，私の見たどこの書庫も同じだった。

３つの書庫をあわせた総延長は１万6000フィートになるという。１フィートは約30センチだから，５㎞弱の長さになるだろうか。

ここで，産児制限や母性保護運動で日本でもよく知られているマーガレット・サンガー夫人の資料を見せていただいた。彼女についての資料目録は一冊の分厚い冊子になっている。

資料はかなり沢山あって，200～300ファイルになるそうだ。そのファイルの一つを何気なくのぞいたら，一枚の写真があった。その写真には数家族と子ども達が写っている。「どこかで見た顔だな」と思って横の説明を見たら，加藤勘十とシヅエ夫妻だった。

加藤シヅエは来日したサンガー婦人と行動を共にしたらしく，他の何枚かの写真にも一緒に写っていた。日本語の資料も沢山残されてい

私を案内してくれたアンバーさんとその愛車

る。

この後，帰りのバスに間に合うように，アンバーさんが愛車で停留所まで送ってくれた。大助かりである。

彼女は，ヤングスタウン州立大学で開かれた労働者階級研究センターのレセプションで，たまたま私に声をかけ，スミス・コレクションを見に来るように薦めてくれた。そこからアマースト訪問を思い立ち，こうしてやって来たわけだ。

彼女の薦めがなければ，アマースト訪問も，スミス・コレクションやライマン・コレクション，シャロンさんとの出会いもあり得なかった。その上，わざわざ車で私を迎えに来て，スミス・コレクションまで案内し，バス停まで送ってくれた。

お礼のいいようもない，とはこのことだ。異国での人の親切は身にしみる。本当に有り難いものだ。

人の出会いとは不思議なものだが，このアンバーさんとの出会いは，私にとっては大変貴重なものだった。いつか，日本で再会することを約束して別れたのであった。

（以下，続く）

（いがらし・じん　法政大学大原社会問題研究所教授）

公務労働の現状と未来

先進主要国の公務員制度の現状と日本の課題

（Ａ５判・約140ページ，定価：1500円＋税）

◆第１部:先進主要国の公務員制度◆

ドイツ公務員制度の概要／縣 公一郎（早稲田大学教授）
イギリス公務員制度の概要／西尾 隆（国際基督教大学教授）
フランスの公務員制度の概要／下井康史（鹿児島大学助教授）
アメリカ公務員制度の概要／原田三朗（駿河台大学教授）

◆第２部:日本の公務員制度をめぐる諸課題◆

公務員制度改革とＩＬＯ／花見忠（上智大学名誉教授・日本労働研究機構会長）
日本の公務員制度と改革をめぐる問題／早川征一郎（法政大学教授）
公務員の労働三権をめぐる先進国の動向／清水敏（早稲田大学教授）
公務労働をめぐる主要判例の軌跡／高橋清一（元茨城大学教授・弁護士）

◆第３部:資料編◆

■申込先■

（財）日本ＩＬＯ協会/ http://www.jilo.or.jp

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町１－２３　宗保第２ビル

電話03-3294-3341　FAX 03-3294-8220　上記のホームページからも申込できます。